

# 岩野泡鳴「五部作」への距離

—△破壊的主観▽をめぐって—

伴

悦

△泡鳴一代の傑作であるばかりでなく、明治大正文学の傑作▽と宇野浩二などに評価された五部作は、事業を△自食▽し、放浪と悲慘の所産である点、諸家の一致するところである。傑作の意味の大半は、泡鳴という人間の生きかたにかかわっている。正宗白鳥、稲垣達郎、石川淳、寺田透、猪野謙二、吉田精一、大久保典夫、和田謹吾などの諸氏が、泡鳴の生きかたにふれるとき、それぞれ感慨において、親和的、非親和的にかかわらず異常の関心をはらわれていた点に関しては等しいものがあつた筈である。異常な関心を促すのは、まさに泡鳴の特異な生きかたのゆえんである。実生活者と芸術家としてのそれぞれの行動が、不可分に統一されていく泡鳴の△生きかた▽は、それ自体近代日本に、かつてなき無類の一大事件に属するものであつた。

△彼によつて、人間の創造力あるいは行動力が、近代日本において嘗つてみられなかつたくらゐの積極性を以て主張されてゐ、それを身を以てぶつかつて実践し、戦ひ貫いてゐる点である。いひかえると、人生を人間の行動そのもののうちにおいて認識しようとした、比類なき意欲と実践の逞しさである。そして、これこ

そが高い作家精神の本格であるべきものだ。▽（稲垣達郎、「岩野泡鳴」）

△実行哲理▽を重視し、その分析をとおして、泡鳴の精神の若しさと作品の新鮮さの最も根本的なひとつの契機に迫まろうとしたものである。

△思想といふ廻転木馬の上で腰を抜か▽すことなく、また卑近な文学的擬態に溺れることなく、△思想は生活の属性だといふ陳述を、泡鳴ほど具体的に充実した人物は明治以後、（少くとも文学の場合では）他にただの一人もゐない。▽といったのは石川淳であるが、思想や、創造力が、△比類なき意欲と実践の逞し▽い人間の行動力、△生活の属性▽として厳存すべき点で稲垣、石川の両氏は一致しているとみてよからう。また極最近、久保田正文氏は、△日本の自然主義文学の内包していた可能性と矛盾とを、生活と文学の両側面において、その極北まで追いつめないで止まなかつたような個性として、岩野泡鳴の人と文学は、私にとつて何となく気になる作家として、いつも宿題のようにかかつてゐる▽（日本読書新聞、「転向者の視点から」・大久保典夫『岩野泡

鳴』評、39・1・20）ともかいている。つまりその点でいえば、日本自然主義文学の内包する△可能性と矛盾▽を生活と文学の両側面で、どのような運用のもとに、追尋していったが問われなければならぬ。

五部作の主人公を、泡鳴自ら△利那主義の実行哲理家▽と銘うった△心熱的生活者▽は、いついかなる場合においても、不斷に自由闊達、自己發展的に生活を充足させねばならない宿命を背負っている。そこには寸分の遲滞があつてはならぬ。ひとつまちがえば△私小説▽へ転移していくかもしれないわが身をどうすることもできない。そうした△微妙な均衡状態▽に成立する一種の△危機の文学▽、△不安の文学▽ということにならう。（猪野謙二、「自然主義の文学Ⅱ」）過不足ない△思想は生活の属性▽であるという△陳述▽は言及しえて、なお尽しえない種類のものだろう。

ただし、その△思想は生活の属性▽だとはいえ、それはあくまで建て前としてであり、時には生活よりも思想が先行する場合がなかったわけではない。当然その場合に△微妙な均衡状態▽はくずれていかなばならない。特に五部作の舞台にのりだしていった時期の泡鳴の生活的状況は、まさに星雲状態をおもわせた。

△北辺流浪は手のつけられない形のものになりかけてゐたらしいので、幻影をつかむことにはなほ焦躁、思想に飛びつくことにはなほ性急でしかあり得ないやうに身心が焚きたてられてゐたのかも知れない。すなはち、はるかに悲願する方向へ手を伸べるのではなくては運動の息がつかないほど、生活がずたずたの傷

でよろめいてゐたのかも知れない。▽（石川淳、「岩野泡鳴論」）創造ないし思想、文学に対する極面としての△生活の属性▽の内部的緊張の状況をいかになくおさえた一文であるともてよい。

五部作は、諸種のいきかがり上、しよせん最初の構想をはなれ、「耽溺」をはみだすかたちの現行版でしかなかったかもしれないし、家を抵当にまでして、あたらしい生活の局面に自らをかりたてたかれではあつたが、結果はやはり性急な思想の先行をゆるさずにはおれなかったことは、泡鳴自身のために不幸であつた。

明治四十二年二月「耽溺」発表の時期を前後し、北辺における事業的生活をはさみ、五部作第一陣「放浪」（明治43・7、のち大正8・7改訂出版）までのかれの実生活者としての航跡は、にわかに重要な様相を呈してくるはずである。

かれが、「耽溺」を発表したとき、すでに五部作の文学原理にふさわしい『神秘的半獣主義』と『新自然主義』の二評論が公版されていた。つまり自然主義文学理論史にかかわる泡鳴の新自然主義文学理論の構築が、半ばそのかたちあるものとして、姿態をあらわにしつつあつた。特に『新自然主義』にもりこまれるべくかかれていた諸論が、公表されていく時期は、いわば説売新聞紙上を舞台に、△博文館楼上▽ないし△早稲田文学▽上の自然主義の激動に対応する泡鳴の最も戦々たる時期でもあつた。その核となつたものは、△自然主義的表象主義▽であり、肉霊合致の△実行文芸論▽の建設であつた。△実行文芸論▽の構築に一応のめどがついたか、つかないかの時期に符合して、同時に一方で創

作実践にたたねばならない季節でもあったのである。自己の「実行原理」をまさにその段階で、秤量せねばならぬ強制を自己に課し、「破壊的主観」を地でいく「耽溺」をかかねばならなかった。その「破壊的主観」の背後の力となったものは、四十一年を半ばに意識化してくる「実行と芸術」の問題における、特に島村抱月の観照の人生ないし「観照の文芸」に対する泡鳴の実感ないし「実行文芸」の問題に集約できよう。その意味で、抱月らの「傍観」的態度を痛激する、泡鳴の文芸と哲学を合致させ同時につらぬく「実行文芸論」の極北と緊張は「混沌、不純、迷妄、苦悶、一利那」の発現をめざして熾烈の一途をたどっていった。

「傍観」や「仮惑」の余裕ないし沈滞と逡巡を一手に払いのけながら、つきすすむ無限定な自我の完全関数的努力のあらわれをそこにみる。客観的にはその果敢な実践は、かれを北辺の放浪の途にのぼせたのである。そこにまた日本自然主義リアリズムの極度においつめた徴表があった。極北徴表の時期は、「耽溺」公表後、「放浪」執筆の時期までにつらなって状況を一層きわだたせることになるわけである。「新自然主義」にあつめられたかれの戦闘的な類のもの多きは正宗白鳥との接合による読売新聞紙上から放射されたものであるが、「放浪」発表の四十三年七月の前月白鳥の読売新聞退社を機に、泡鳴自身読売紙上から一応姿を消すことになる。そのとき、『悲痛の哲理』、『放浪』の出現を加算してかれの新自然主義文芸理論の第一義的役割は完了するとみられる。このへんにも五部作誕生についての「生活的属性」の一つの区切りをしめす断面を、窺視することができる。その点結果か

らすれば、泡鳴という生活者は思ひのほか、合理主義者でもあったわけである。

話を前にもどさねばならない。「耽溺」(代表的名作選集、大正4・5)の「解説」にもあるように「耽溺」が「最も大胆なる表現と最も深刻なる思想とを以て文壇の一角に雄視し來った作者の代表作」であり、「発表当時、告白小説など々称した批評家もあるが、所謂告白小説のような申わけ付きのものでは無く、真の、また深い意味の写実小説であると、作者は自ら云つてゐる。」と記している。告白小説ではなく、真にして深刻な写実小説を確証づけるものが、さきの「破壊的主観」であったことはいうまでもない。しかしそもそもかれのいう「破壊的主観」とは一体かれにとってなんであったのか。なにに対する「破壊」であつたらう。具体的に考えれば、その「破壊」が、かれの文芸論や、五部作、ないし一元描写論にどのような作用をはたし、役割と機能とをもちたらしめたのだろうか。その限界や、功罪といった問題にかかわつて泡鳴文学をトータルに把握する場合、かなり重要な要因として潜在していたことは争えない事実であらう。

かれは後年『利那哲学の建設』のなかの第二篇「新芸術と描写の根本」で「破壊的主観」をつぎのように説明している。要約をしていうと文芸的描写は利那的でなければならず、破壊的主観はこの力によつて「肉霊合致の事実を捕捉」するものであり、この主観を規定して「融通無碍の合致的主観」としている。花袋の『生』には、その点「充実の点」はあつても、まだ浅く、藤村の

「春」にいたっては、殆どないとして△実行と描写とが無関係もしくは縁遠△といった、文芸の実行を説くのは、かれらの態度に飽きたらないからだと主張した。

ときに利那的肉霊合致の論は、「自然主義的表象詩論」（明治40・4、帝国文学）等に代表され、ようやく自然主義文学理論史にかかわる新自然主義文学理論の位置づけが、鮮明化してくる時期に、その文芸理論の実践化を是が非でも強行せずにはおれなかつたことについては前述した通りであるが、そのための描写にかかわって、△破壊的主観△の問題が、その次元で二重映しに、もちあがつてくる。「自然主義的表象詩論」を発表した翌月かれは「イブセン論私見」という一文をまとめている。そのなかでイブセンの破壊について述べる。△破壊△という字句が意識的に使われるようになるのは、それ以後のこととみてよい。だから△破壊△の問題（主観に定着していくのはもう少しあとである）の直接的契機は、例の△イブセン熱△に触発されているとみていいのではない。日露戦争以後イブセン流行は上昇し、イブセンの死をはさみ、四十年二月に小山内薫を主宰に、柳田国男、花袋、天溪、藤村、白鳥、有明、晁、泡鳴などの参加で結成された「イブセン会」の出現で決定的な意味を担うのは周知のところである。このイブセン流行の気流が、たしかに自然主義文学運動と雁行している事実は、単に白鳥の回想にいう「左団次」や「新時代の演劇のため」ばかりの意味ではなかつた。劇作家の真山青果はいうに及ばず、中村吉蔵、長田秀雄、森鷗外、岩野泡鳴にいたるまで、その模倣、影響ないしは関心を強いられずにはおれないほ

どの流行ぶりであった。

このイブセン熱に触発されたとみられる△破壊△の問題は、やがて△破壊的主観△となり、一元描写論として体系化されていくためのいわば、素地ないし前史的意味を担うものであったといえよう。

普通、かれの一元描写が、そもそも『半獣主義』から発しているとはいえず、より明確なたちで論として成立していくのは、「現代小説の描写法」（明治44・2、文章世界）にはじまり、「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」（大正7・10、新潮）などに代表されるのもいうまでもない。

「僕の創作的態度を明かにす」（明治44・1、毎日電報）や、論としての「現代小説の描写法」が、ひとしく△破壊的主観△の主調であるかぎりにおいて、やはり一元描写論の核として存在理由が、具体的に解明されていかねばならないのである。その点についてさきの前史ないし契機についての問題は、いまだにやや曖昧なのではないかと思われる。

少くとも「耽溺」の発表が四十二年二月に新小説にのつたのであるから、その間花袋が『生』（41・4・7、読売）を発表し、その注釈ともみられる平面描写論の根拠を一点にしばつた『生』に於ける試み（41・9、早文）を公表するという一項が介在して、それに対応する泡鳴の肉霊合致の実感、実行主義の文芸論とされるより、むしろ当座泡鳴の論の対象は、抱月の「自然主義の価値」に集約された観照主義の文芸論に対するそれであったとみていいのではない。さらに「耽溺」の執筆完了が、四十一年八

月である事情から推すと、なおのこと花袋の平面描写論に対する一元描写論の対応などという問題は、成立の段階ではなく、なお泡鳴の立場は、△自然主義的表象主義▽による新自然主義の標柱をおしたてたばかりの時期であったことが想到できる。だから本来ならば、△自然主義的表象主義▽の実行主義の文芸を、たてまえに自己發展的哲學的思考、ないしその原理構築に、なお主体をかけていたとされなければならない筈であった。にもかかわらず、先述のとおり原理が創作実践に適用されなくてはならない緊迫した状況下で、△破壊的主観▽の主調が、実行原理を△捕捉▽するといふかたちで、創作実践化、技法として描写のなかに吸着されていく経路があったことに、むしろ問題の核心があったとみられる。

ところでイブセンにみられる△破壊▽とは泡鳴になにをもたらしただかということであるが、かれが、エマソンやヴェルレーヌを対象にしたほどの執着力をもたなかったのも事実である。まさに△私見▽の域をでていない。というより執着力をもちえないほど、生成ない成熟過程が徴表されておらず、自己の絶対的実行原理のなかに埋没しているかのようなのである。「イブセン論私見」の内容は、四十年五月の「イブセン会」例会で発表することになっていた「メーナーバトラー」のイブセン論批判であった。泡鳴のイブセンへの傾倒ぐあいについては、正宗白鳥の『文壇五十年』が、よく引用されるとおりであったろう。△ボンクラのシェークスピア▽より演劇革新に力を注ぐ新しい星としてイブセン讃美は、溢言そのものであった。その強烈な共鳴や、興奮ぐあいは、

なにか派閥的な外部的おもわくを秘めた文壇的くさみの絶無とはいいきれないふしもあった。

ところで二十世紀にふみこんだばかりの当時の日本においても、知性に生を、思想に行動を対立させる世界的風潮に敏感に反応し、詩人としても、ヨーロッパ詩の方向を自覚していた泡鳴なればこそ、現代の本性を△従来の解決と慰安とに満足出来ない程、熟して来た▽として△この熱心で余裕がない程の真面目が、無限絶大の煩悶苦悶となって現はれて居る▽そうした従来の思想や、文芸の母性的極面に対して△清新な生命▽を投与するための破壊の体現者としてイブセンを捉えている。つまり泡鳴自身の自己変革にたつて生そのものに代替させるに生についての多様な説明破棄であり、拒絶のあかしを暗示させるものがあった。したがってかれの△自然主義的表象主義▽の実行主義の文芸が、天溪以下の無念無想の高尚的架空の実在ないし抽象的思考の自然主義理論の実体に掉さし、その後見されねばならなかったのも理由のないことではなかった。

イブセンを世紀末の表象主義線上にうかぶ△活動的意志の権化▽とみた天溪、△作家の主観▽として△九世紀の思潮をとほして発展して来た大自然の主観▽の統治者とする花袋、そして△第一義道德の問題なり▽と倫理的道德問題に、なお収斂して第二義の功利論として捉えざるをえなかった抱月らのイブセン観が、ニューアンスのちがいきそあれ、より△学問的芸術派▽的認識規範にとりつかれた範囲のものであったこともまた事実であった。また一面において△学問的芸術派▽という根本のところでも共通し

ている側面では、たんに抱月らのみではなく、あくまで傍観者としてイブセンに出逢い、「ブランド」のように△強い翼に風を切つて、高く遠く飛べず自己のデモンに仮託せずにはおれなかった鵬外、さらにまたイブセンを△人間意識の甚深急所△を△承当△するものと認めながらも、悲劇の運命を支配する△高邁英霊△の意識が、ややもすると外方に存するがための△暗憎たる風狂△を難じた漱石らのイブセン観ともなお対応するものであった。

もとより△セツパつまった小説△実践にふみこもうとしていた矢先の泡鳴にとって、他の自然主義者ないし鵬外、漱石らの見解とはちがって異質の△深刻な破壊△を、その生命としてみたのは一面当然すぎるころであつた。美学者の従來の偏見に抗する泡鳴の立場である。そしてイブセンの偉大さを、△『自己の一部を押へて居た』どころか、その同類に対する嘲弄をも、諷刺をも、石榴がその実を吐き出す様に吐き出して、其後は至る所『その人全体の印跡を帯て居る』△点に帰して、△深刻△△斬新な悲劇家△として結論づけている。この論理構造は、あくまで自己の△自然主義的表象主義△の独自な利那的自覚のなかのものであり、応用の領域を遠くでるものではなかった。

そして「自然主義的表象詩論」をめぐる「詩歌の根本疑」(天溪)、「今の文壇と自然主義」(抱月)、時事新報文芸週報による各批判、そのなかで特に新報記者の△措辞、格調に要する技巧は、少しも真摯熱烈の度に累を及ぼさないと考へて居るのであらうか△という技巧上の問題に関する一件、つまり自己の主義に拘執

して創作する場合の单调さ、人物、性格の変化にとほしくなるのではないかという批判に、応えていく論理的展開と、構えが要請されていた。それに加えて、高浜虚子の『鶏頭』の写生説、その「序」における漱石の写生の問題提起に触発して、はじめて△破壊△は△破壊的主観△として主唱されてくる。(彫金界の過去及現在、明治41・2)、さらに『基督の自然主義』を評すを経て、悲痛を目的にするのではなく、△破壊的主観△は、その△状態△△直接生命△持統の体として追尋され、△懷疑、苦悶△を伴つて、△自己自食△を生命とする新自然主義文学の補強に役立てられ、段々に形あるものになっていった。しかも「耽溺」の出現によって、集中的になされた、描写上の批評とあいまって、技術的論理の構築と、展開はいやがうえにも具体的に現実的なものにならざるをえなかった。

だが泡鳴の場合、技術論プロバーにおける論理的展開などは、初めから念頭になかった。その意味でしよせん論理的信仰者にはなれない自己であることを泡鳴自身よく知っていた。大体泡鳴は方法が規範のワクの中に封鎖されることを最もこまなかつたのである。

「耽溺」をかきえて、なお泡鳴の感懷は、△欧州の自然主義と表象主義(前者は物的に偏し、後者は非物的に失す)を共通の根底に於て洞察し、前者の平面的な点を破り、後者の観念的なところを壊し、破壊的主観を以て事物を直描写すべし△(『文学の新傾向』、新天地明治41・12)というにあった。

ともあれ、以上の経過からしていえることは、この△破壊的主

観√は、本来文学における実行現理生成を△捕捉√すべき性格のものであった。が、自己の肉霊合致の実行原理に創作をきりこませる場合に、原理を創作に媒体させるための方法上の手段に化していくコースをたどった。そしてイブセン問題を機に拍車をかけざるをえなかった。泡鳴にとつてそのことは、あくまでも法外なまでに不本意なことであつたにちがいない。その意味あいからすれば、描写論として成立する前から、初発的に△破壊的主観√の中核は、その姿を絶対化された行動原理としてくずすことなく「イブセン論私見」から地つづきに△一元描写論√まで、持続的にかさなつていふと考えられる。だから△破壊的主観√は、たてまえからすれば、△自然主義的表象主義√を創作実践に強引に結びつけていく自己内部の論理検証の一步前進を企画すべき類のものでありながら、どうにも恰好のつかない錯雑、空疎なものとして内蔵するところとなつた。このような航軌のなかに位置づけられた「耽溺」一篇が、世の関心をあつめたものの、だれよりもかれ自身満喫しえなかつた心懷をおもひにつけ、△自然主義的表象主義√をなお△破壊的主観√として明確に論理化しえないがための不十分さに帰すことも可能であらう。「耽溺」が、やはり△詩界から散文界に移つたゆるみ√のなかの試作を超えるものでなかつたのも、かれ自身よく知るところであつた。

いずれにしてもイブセン流行の尖端につらなり、△破壊√的主観に、自己を没入せずにはおれなかつた泡鳴の性急さは、覆うべくもなかつた。むしろ性急さをおもわせるほどの、実行原理の先行であり、飛躍的生命が、本来的なものとしてあつたといふべき

だつたかもしれない。

「耽溺」を五部作から独立させた事情や、「五部作」の成立ぐあいにからまる問題、さらには、ついに熟しきれずおつた△一元描写論√そのものの限界や、「私小説」へ架橋するといった分岐点を予測させる転機でさえなかつた。

泡鳴の△破壊的主観√とは、資質的に本来そういうものでしかなかったといへば酷にすぎるであらうか。きわめてオリジナルな哲学的領略に生命を賭けた作家としての△最大の芸術家の敵√がもたらす反作用としての運命的なもののさへ感じられるのである。

そうした観点にたつと「耽溺」をかきえたあとの泡鳴の心境は、まことに複雑きわまるものがあつたにちがいないのである。

小説家としての自己の力の限界と、それにまつわる客観的外部の評価、ないし反響とによる焦慮である。

それはまさに『半獣主義』を決意をもつてかく直前の星雲の心的状況に通うものであつた。そのあらたな決意の再現であり、そのかぎりて自己自身の持続的発展に悲願をかけるならば（そしていまやようやく文芸理論に限つてみても自然主義的文学運動が、明治四十一年をピークに下降していくなかで）十全な意味で、既存の自己そのものへの△破壊√以外にはなかつたはずである。

既存の自己への△破壊√は、△単に描写上の自然主義ではなく、実に初めから態度上の問題√（実行文芸とデカダン論、明治42・2）として、描写上に限定しえない実行文芸論を中核とするものとはいへ、在来の対自然主義文芸理論にみられたようなより学理的概容での抵抗では、自己自身の△歴史以外の歴史的人物√

を保障しえなくなっていた。

その方向での△破壊▽であり、無分別な除外や拒絶ではすまされない技術的問題にも注意を一方はらいながら、自己の文芸を再組織しなければならぬ立場の到来であった。

ひとたびは筆をなげだしてまで実行原理に、あたらしい生活をきりこませずにおれなかったいわゆる△精神事業▽（耽溺）から△物質的事業▽（鑑詰事業）への発展、努力の果てに、「家」を投資し得たものは、物質的破産だけであり、物質的破産は即自的に物質同化への末路をしめすものであった。

死線をさまよいながら死神からさえ、みはなされた泡鳴の前には、△自己を喰って足るよりほかに道がない。▽△自己を糧▽とするあらたな生への飛躍、△悲慘悲痛な活動▽の純粹持続だけしかのこされていない。

しかも大体この「個人」としての△悲慘悲痛な活動▽家は、絶対主義体制としての「国家」に對置して、自己検証を一段と強めていかざるをえないものとしてあった。

つまり『悲痛の哲理』の論理構造の核は、そのような状況下での生成を意味している。

もともとこの「個人」と「国家」の問題に関して執拗に血みちをわけてかかわった文学者としての泡鳴の位置は、高山樗牛などの現実疎外の超絶的△美的生活▽の本能主義による排外的国家体制へのリアクションの位相に、その出発点があったことは、ここで確認しておく必要があるだろう。

すでに『半獣主義』の「国家と人生」にはじまり、△国家は乃

ち人生▽とする『新自然主義』を経て、直接的には現段階においては、「文芸」取締問題と自然主義（読売新聞、明治41・11・8）におけるような自然主義文芸に△圧迫妨害▽を加える当局への抵抗をふくむ、△威力ある国家個人主義▽が、『悲痛の哲理』の異名となって展開されていくわけである。

欧州の皮相文明ないし在来の儒教的、仏教的習俗思想に對置する△優强者の全人的發現▽の立場である。そしてこの行程は、反藩閥、反官僚、反軍閥の姿勢を自発していく方向にありながら、△優强者▽の論理は、かつての抱月などにみえた前述の△倫理的▽問題を、権力の論理に転進させ、△家族国家▽の円環外におかれることなく、対外緊張、ないし膨脹のためのイデオロギーに転化していった。

△外国貿易、殊に米國へ輸出貿易品中の一要素なる蟹の鑑詰をやらう▽△それだ、それだ、多年わが國を最も子供扱ひにして来た、あの傲慢無礼な米國に對し、商売的にわが利益の鬱憤を少しでも晴らすのもそれだと、渠は即座にきめてしまった。そして、厚い氷の張った北極の水野や氷山を探検しに出かけるよりも以上の壮烈と愉快とを感じた。▽（発展）

家の投資による物質同化は、△父の建てた家を譲り受けた気持ちには、一と肩おろせただけに、いよいよ無責任なる▽△パトリモニアールなヴェール▽のなかで、家父長の権力的なものをさえ意識しえず、無謀な事業に凍結し、現象化されていかざるをえない。それが欧米列強の気げんをうかがう政府当局の従属的態度に對するナシヨナリストイックな反撥となり、対外的△商売的利益



の鬱憤∇を誘発し、高かまることが、即結局は支配機構の中に溶解せずにはおかぬ内部矛盾として現実化していく方向をたどる。

換言すれば、泡鳴の∧破壊的主観∇は、生来「墮藩弱兵」の「無力感」に閉ざされた階級的利益に反する状況において、専制国家から藩閥の性格を、もぎとる自己の世界観、文芸実行論の構築に主体がおかれ、生活の具象に真実のあかしをたてえたと言行したときにさえ、∧前期的有機体∇としての∧個人∇が、∧家族的國家∇に再生されながら、∧社会∇にかかわる余地を、十分に授与せずにおわらざるをえなかったのではないか。

∧社会主義並に虚無主義がわが国人の政治思想に努力を占めることは到底出来ない。∇（文芸的取締問題と自然主義）とする現状維持とそれへの肯定において、不可避的墮壊への道にいきづま

ったのである。

いまや泡鳴は、藩閥政治が倒壊しつつあった政党政治時代の尖端に、つまさきだち、∧超党派∇的姿勢のまま、あえて自己に強制させることで描写論上においても、徹底した自己検証∥∧自己破壊∇の集積機能を途絶させていかざるをえなかった。

後年宮島新三郎のいう∧人生観上において一元説∇を主張する泡鳴が、∧何故に描写論の上で徹底した一元主義即ち作者自身の見た世界を自由に表現せよといふ形式無用論へ這入らないのかしら不思議でならない。∇（岩野泡鳴氏一面観、早文、大正8・9）という∧不思議∇さや、屈折、ないし∧文壇的融解∇のゆえんは、もはやあきらかなところであろう。のみならず、∧私小説∇の文学的成立をも、その地点で予測しえてゆきづまったといえるのではないかと思われる。

（六四・五・二六）